

教育・福祉相談支援への〈場〉所論援用の試み（Ⅰ）

八尋 茂樹*

新見公立短期大学幼児教育学科

（2016年11月30日受理）

近年、教育や福祉の相談現場において、当事者やその家族が抱える課題、要因、背景が複雑化し、対応する相談員に非常に高度なソーシャルワーク機能が求められている。しかしながら、例えば、不登校問題などでは、特に当事者と面会ができないことが支援の展開を阻み、充実したケアを提供できずに、課題が放置されてしまうことがある。本稿では、現代思想における〈場〉所論のフロント構造理論を援用することによって、面会できない当事者の状態を、作用一の関係にある相談者の様子や語りを通して把握し、支援を展開する機能的構造形態の解釈を検討した。

（キーワード）相談支援、〈場〉所論、フロント構造理論

Ⅰ．問題の所在

教育現場での教育相談、保育現場での保育相談、障がい児療育現場での福祉相談など、児童生徒を対象とした対人援助職の分野において、相談支援や相談援助は、ソーシャルワーク機能を非常に重視する業務である。特に、近年、精神的困難状況にある当事者やその家族が抱える課題、要因、背景は複雑化し、また、時間の経過とともに刻々と変化し、支援者には安定かつ高度な技術が要求される。

筆者が携わってきた市の保健健康福祉部の保育・教育相談支援も例に漏れず、支援が非常に難しいケースが年々増えてきている。例えば、不登校やひきこもりの相談支援業務において、不登校生徒児童やひきこもり青年自らが相談のテーブルにつき、面談をおこなうことができるのならば、その時点で課題克服の半分以上は達成されている。実際には、相談案件のほとんどが家族や親族からの申請であり、相談支援の最初のインテーク面接から支援の終結まで、一度も当該児童生徒や青年と面会できず、直接的な接点を持つことができないケースが多々存在する。また、このような案件の場合、多くが「クリニックに相談に行ったが、医師から、『本人から直接話が聞けないので、これ以上はカウンセリングできません』と断られました」などと、「見放された」と失望していることが多い。あるいは、相談員も「お子さんに一度もお会いできていないので、ご本人には何もできておらず、大変申し訳ないのですが、相談室でご家族からお話を聞かせていただいてストレスを発散していただくという、ご家族を対象とした精神保健的ケアに努めさせていただいているのが現状なんです」と、不登校相談支援が順調に進まなかったり、事実上、課題が放

置されている苦悩を吐露することがある。確かに、当該児童生徒を直接診断することによって、より正確な助言を提供することはできる。しかし、相談者のみとの面談では、はたして有効的な支援は不可能なのであろうか。

Ⅱ．相談支援への〈場〉所論の援用

筆者は、「課題を抱えている不登校児童生徒本人と直接会うことなく克服することは不可能である」とは断定しない。結論的に述べるとすれば、その保護者ら家族のみとの面談を重ねることでも、課題の克服に到達することは決して不可能ではなく、その事象は〈場〉所論における、この「フロント構造」の概念を援用することによって説明可能であると考ええる。

1. 〈場〉所論におけるフロント構造理論の基礎概念

〈場〉所論研究会21は、宗教哲学者の八木誠一と八木洋一を中心とした現代思想、特に〈場〉所論に関する研究会である。会員には、宗教学者や思想研究家の他に、看護職や福祉職、教育職など、対人援助職に従事する者が多数名を連ねている¹⁾。例えば、この研究大会において、増田（2014）は「〈場〉所論との会話 ～〈ケア〉の意味をとおして」というテーマで、福祉の構造を〈場〉所論によって分析し、発表した。また、本田（2014）は、看護思想論を〈場〉所論を援用して展開している。場所論とは、西田幾多郎の「場所の論理」から発しているが、本稿で扱う〈場〉所論はこれとは異なり、八木誠一が、人と神（キリスト・聖霊）の相互内在を語るテキストを場所論的神学とし

*連絡先：八尋茂樹 新見公立短期大学幼児教育学科 718-8585 新見市西方1263-2

て論じたことに端を発する。本稿でも西田の場所論と区別するために＜場＞所論と表記する²⁾。そして、この＜場＞所論において、非常に重要な概念のひとつが「フロント構造」である（八木誠一、1988）。

フロント構造の概要は以下の通りである。例えば、磁石のS極とN極は、その両極においての区別はあるが、決して切り離すことはできず、SはN、NはSをと、互いの存在を前提とすることによって初めて存在し、かつ、磁石は全体にわたっての秩序によるひとつのまとまりをなす共同体となる。あるいは、壁Wの部屋Aに属する面をaとすれば、aはAの一部であるが、一方で、aは隣接したもうひとつの部屋Bの存在を示し、Aの中にBを表出していることになる。この場合、AはAの存在だけでAなのではなく、Bという他者との前線（フロント）において接点を持ち、関わりあうことによってAとして存在しうるのである（八木誠一、1988）。このフロント構造は、上記のような1対1の直線的な関係のみではなく、多角形、あるいは円として、複雑な統合体を成している。また、実質型（物理学的や生物学的に形ある物質の授与、影響を伴うことによって存在者を規定するフロント構造の型）、波動型（形のない感覚や思想や心の授与、影響を伴うことによって存在者を規定するフロント構造の型）、フィールド型（実質型と波動型の水平面のフロント構造を垂直面のフロント構造によって表面化する型）の3つに分類している。八木洋一（1999）の例えでは、ある「物」が存在したとしても、それは単に「物」でしかない。人の「心」もその「物」の存在とは関わりはない。しかし、その「物」が他者にプレゼントされ、他者の心を動かすとき、「物」は「心」の形（フロント）としての存在となり、「心」は「物」によって形（フロント）をなす。もともと「物」はプレゼントする人の「心」のフロントであり、「物」が受け取られたことによってプレゼントした人のフロントは、受け取った人を構成するフロントとなる。あるいは、さらに返礼がなされれば、何重にも折り重なったフロントが、最初にプレゼントした人のフロントを形成する。これが「フロント交換」という構造であるとする。

2. 相談支援へのフロント構造理論の援用事例および考察

次に本節では、不登校における相談支援において、最も多いケースである「当該児童生徒と面会できず、母親だけの面談」の場面で、フロント構造理論の援用について考えてみたい。

上記のようなケースでは、相談者の母親のほとんどは、インテーク面接においても、その日までの辛い思いが募り、涙を流しながら話をしてくれることが多い。不透明となった我が子の将来を心から案じ、また、親類や時には近隣の住民との付き合いを極力避け、隠れるように生活を送

っている母親もいる。そして、この母親の状態こそフロントである。

八木誠一（2012）は、＜場＞所論の説明において、次のような比喩を用いている。夜空に月が出ている時、当然、太陽は見えない。しかし、月光が太陽光の反射であり、月が見えることによって、太陽の存在は証されているのである。そして、月光は月光でありながら、太陽光でもある。太陽の作用圏は太陽の作用の「場」であり、月は太陽光を宿す「場所」である³⁾。つまり、月光は太陽そのものの光ではないので＜実体的一＞ではないが、月光と太陽光は＜作用的一＞の関係にある。

以上を、面会のできない不登校の子どもとその母親の関係に置き換えてみよう。相談員からは子どもの姿は全く見えない。しかし、母親は子どもと同じ家（「場所」）で生活し、子どもとの接点を持ったり、持てなくても同じ空間で子どもの空気を肌で感じたりするという「場」に身を置いている。場において、子どもの空気（子どもからのいのちの働き）を吸収している母親の様子や語りは、相談員にとっては会うことのできない子どもの「現実性」をうかがうことのできる「場所」となる。つまり、母親と子どもはもちろん実体的一ではないが、作用的一の関係にある。

相談支援で最も困難を極めるのは、課題を抱える本人のみならず、その家族や周辺の人々からも全く支援要請がない場合である。不登校支援に関しても、相談支援窓口へ申請してくる家族は、その時点ですでに解決への一歩を踏み出しているが、窓口にとどり着けない、あるいは、たどり着こうとしない家族は潜在的かつ孤立した存在となり、問題の長期化と悪化が確実に進行し、最も根深い問題のひとつである。しかるに相談窓口で電話をしたり、実際に相談室に足を運んだりする母親のほとんどは、いくつものハードルを飛び越えて、勇気を振り絞ったり、藁をもすがる思いで来ている。このような母親は、我が子を細かく観察し、好転しない状況に対し自分のことのように心を痛めている。よって、相談員はこの母親から会うことのできない子どものフロントを見出すことができるのである。相談者が母親から状況や母親の気持ちを傾聴し、それに沿った適切な助言を授与することによって、母親の気持ちや行動に変化が及び、帰宅後より、我が子への母親のフロントの提示が始まる。例えば、苦悩を抱える子どもが「自分は母親に守られている」と安心感を抱くようになり、母親のフロントを受け入れた時、フロント交換が成立し、新しい支援展開へと進むことがある。何年も家族と話をしたことがなかった子どもが、突然、予兆もなく家族に話しかけたりする現象が度々あるが、これはフロント交換が成立した状況にある。

次に、フロントの認知の仕方について考察したい。会うことのできない子どもの「現実性」の確認の仕方は、相談支援において非常に重要である。作用一である母親の語り

を、相談員が何の検討もなく、児童生徒の「現実」としてそのまま受容していくことは、その後の相談支援を適切に展開していくことを阻む恐れが生じるからである。

八木誠一（2012）は、「イメージを喚起するものをイメージ対象と呼ぶとすれば、その対象は特定のイメージを喚起することによって、イメージと結合した反応を呼び起こす」としている。例えば、水戸黄門のドラマにおいて、助さん格さんが印籠を見せて「このお方を何と心得るか」という言動によって、直前まで「おいばれじじい」と罵っていた悪党の認識は即座に「恐れ多くも先の副將軍」に改まる。人の態度は、「何であるか」ではなく、「何と心得るか」によって決まるためであると八木誠一は指摘する。

例えば、我が子を不登校から脱却させるために、母親は様々な本やインターネット、口コミなどから必死に情報を入手して手を尽くそうとする。我が子を一番知っているはずの母親が、様々な情報に包まれることによって、我が子を「何者か」という現実性によって認識するのではなく、母親が「何と心得ているか」という、母親の作り上げた虚像で我が子を捉えていることが多々ある。相談員はこの虚のフロントを明確に認知し、「ありのままの現実」と、「言語化され、時に脚色されたもの」が全く別物である可能性もあること⁴⁾を母親に明示することが重要である。

また、家族が「不登校＝悪」の世間一般的なイメージに固執するあまり、「不登校からの脱却＝我が子の幸せ、家族の幸せ」という認識のみに縛られるケースも多い。学校で一般的な生活を送ることのみが「普通」であり、そこから逸脱することは「普通ではない」、「不幸である」と考えられがちである。これは「離散家族＝悪」というイメージも同様である。学校復帰や家族再統合によって、例えば、いじめや虐待が再燃するとすれば、不幸の再構成をし、二次被害を生み出すことになりかねない。教育や福祉、精神保健の分野では、医学的な事実を残しながら、社会的・文化的に上塗りされた意味（ラベリング）について再考し、相談者と相談員とで一緒に事実を認識し、事実可能な限り近い「意味」に貼り替えていく作業をおこなっていく必要がある⁵⁾。その際に、相談員は、母親に適切な「言語」を示し、母親が自らの経験を言語（記号）によって表出できるように援助することが大切である。その作業を丁寧に進めることによって、フロント交換で我が子と作用一となった母親から、相談員は正確な情報（事実）を得ながら、同時に適切な助言や選択肢を母親に冷静に提示することで、会うことのできていない不登校児童生徒への支援を展開していく可能性を高めていくと考える⁶⁾。

以上、本稿では相談支援機能の解釈を、〈場〉所論におけるフロント構造の基礎理論の援用によって試みた。今後は引き続き〈場〉所論の視点から解釈した相談支援の構造化を検討していく。

注

- 1) 本稿では、八木誠一と八木洋一の文献の区別を明確におこなうため、両者に関しては本文中に姓名で記した。
- 2) 西田の場所論との区別として〈場〉所論という表記を用いることは、2015年度の〈場〉所論研究会21で承認されたが、最初に明文化されたのは、八木洋一（2016）である。
- 3) 〈場〉所論では、「場」と「場所」を区別して使用されている。例えば、八木誠一（2012）の定式化によれば、「場」とは、そのなかに置かれた人間が特定の仕方できかわり合うように相互作用を促される空間のことであり、それを現実化するところが「場所」であると考えられることができる。
- 4) 八木誠一（2012）は差別もこのような構造から起きると指摘する。支援を受ける側の相談者のみならず、支援をおこなう側の相談員も、この点における研修、講習等を受けるべきであると筆者は考える。
- 5) 語りの文脈の読み直しや意味の置き換えの作業は、例えば、家族システム理論から派生しているナラティブアプローチがエンパワメントに主眼を置いている点で、非常に有効な支援手段であるが、ここで提示する「意味の貼り替え」は、「母親の語りから現実や現実性を抽出する作業」とするため、この作業自体には「ストーリーのセラピー的再構築」の要素は含ませていない。
- 6) 三井（2004）は、支援者は支援対象者のニーズの翻訳を行う立場であるが、支援者が対象者と「近すぎず、遠すぎず」の適度な距離を取りながらニーズの翻訳を行わなければ、共倒れになる危険性を指摘している。

文献

- 増田 樹郎：〈場〉所論との会話～〈ケア〉の意味をとおして～、〈場〉所論研究会21，四国学院大学，2014.8.10.
- 本田 里恵：ナイチンゲールにおける看護思想4，風跡40，1-33，2014.
- 八木 誠一：フロント構造の哲学，法蔵館，1988.
- 八木 誠一：場所論としての宗教哲学，法蔵館，2006.
- 八木 誠一：〈はたらく神〉の神学，岩波書店，2012.
- 八木 洋一：コミュニケーションの語源とその原像，四国学院大学論集99，25-47，1999.
- 八木 洋一：「〈場〉所」論演習（Ⅰ），風跡42，1-17，2016.
- 三井 さよ：ケアの社会学——臨床現場との対話，勁草書房，2004.